

興教大師の淨菩提心説について

元山公寿

はじめに

菩提心の思想は、大乘仏教の経論において、さまざまな形で論じられ、次第に強調されて説かれている。そして、この思想は、弘法大師が日本にもたらした真言密教では、その所依の經典とされている『大日経』や『金剛頂経』において淨菩提心や普賢心等という形で注目されており、この思想がさらに『大日経疏』や『菩提心論』などの密教論疏における中心的な位置を占めるに至っている。これらの経論をもとにして真言教学を組織した弘法大師の思想には、この淨菩提心の思想が常に底流を流れていることは否定できない。この傾向は興教大師に至ってさらに顕緒となっており、この淨菩提心の思想を基底に置いて、いわゆる一密成仏の思想を打ち出してきている。この淨菩提心説は、『二期大要秘密集』にみられるような順次往生を目指した場面で説かれる菩提心説とは異なった、即身成仏をテーマとした真言密教固有の菩提心説の展開であると言えよう。

そこで、この真言密教固有の菩提心説である、興教大師の淨菩提心説について、『一期大要秘密集』に見られる菩提心説と対比しながら考察していくことにする。

一、淨土往生における菩提心

興教大師の菩提心に関する論述は二通りの展開を見せている。すなわち、一つは、主に『一期大要秘密集』において論じられている淨土往生を想定した上での淨土教的な發菩提心を中心としたものであり、もう一つは『淨菩提心記』などで論じられている即身成仏を想定した上での密教的な淨菩提心を中心としたものである。

このうち最初の『一期大要秘密集』に見られる菩提心説については、すでに以前に考察したが、深心によって菩提心を發す、すなわち菩提を求めようという心を發すというものであり、この發菩提心の具体的なあり方が四弘誓願を發すという形で表わされていた。興教大師によれば、この菩提を求める心を發することによって、臨終の場面において極樂淨土に往生することが可能となる。

この發菩提心を淨土往生の必須条件とする菩提心説は、淨土三部經のうちの『觀無量壽經』⁽²⁾や『無量壽經』⁽³⁾、及び、源信の『往生要集』⁽⁴⁾などにおいて發菩提心を淨土往生のための必要条件とするものと同様であり、これら淨土思想からの影響をうけた淨土教的な色彩の強いものであるといえ、特に源信の『往生要集』の影響は見逃せない。しかし、これは、法然が示した菩提心を行としてとらえて、これを無用とし、ただ念仏のみが淨土往生に必須の条件であるとする菩提心説⁽⁵⁾とは全く異なった展開をしている。

また、この『一期大要秘密集』における菩提心説は、淨土教からの影響ばかりではなく、弘法大師に帰せられている『秘密三昧耶仏戒儀』⁽⁶⁾からの影響も考えられる。というのは、興教大師は、この『秘密三昧耶仏戒儀』の冒頭の部分⁽⁷⁾を『心月輪秘釈』に完全な形で引用している。⁽⁸⁾そして、この『秘密三昧耶仏戒儀』から興教大師が『心月輪秘釈』に引用している文と、『一期大要秘密集』において「文にいわく」として出している文とは、極樂往生を目的とする

こと以外はその内容的に非常に酷似している。したがって、ここで『一期大要秘密集』に引用として挙げられている文は、おそらく『秘密三昧耶仏戒儀』からの趣意の文であろうと推定されうる。このため、『一期大要秘密集』における菩提心説には、浄土教思想からの影響とともに、この『秘密三昧耶仏戒儀』からの影響も見逃せないものであるといえよう。

もちろん、この『一期大要秘密集』の菩提心説においても、密教的な要素として『菩提心論』所説の勝義・行願・三摩地という三種菩提心が述べられており、これが現身往生、すなわち即身成仏のための経路とされている。しかし、これは「懈怠小機の者」や「但信行浅」の者は順次往生し、「精進大機の者」や「上根上智」の者は現身往生すると言って、興教大師が機根の違いや行の浅深によって順次往生するものと即身成仏するものとを分けていたことからも解るように、「菩提心論」にも説かれているような「上根上智の人」⁽¹⁰⁾のために示されたものであるといえよう。そして、これが即身成仏を目指す真言密教特有の菩提心説であり、『真言浄菩提心私記』などに説かれる浄菩提心説へとつながるものである。

すなわち、興教大師が『一期大要秘密集』において示そうとしたものは、現身往生するための用心というよりも、むしろ小機の者や行の浅い者のための順次往生への用心を示そうとしたものであると考えられる。これは、『一期大要秘密集』の中に示されているように、自らの死を目前としてはじめて自らの死期を悟って、仏門を目指して極楽往生を願う者のための臨終の場面での用心として、菩提心という面では、発菩提心ということを重視したものであると考えられる。そして、密教的な菩提心説であると考えられる浄菩提心については、すべてのものには終わりがあると悟って仏門に入って、即身成仏を目指す者のために説かれているもので、この場合には、仏門に入った段階で菩提を求める心は当然発しているものとされ、その仏門に入って菩提心を発した後、いかにして浄菩提心を開発するかと

いうことを主眼として説かれているものと考えられる。

この淨菩提心を主眼として興教大師が著わしたものが、『真言淨菩提心私記』をはじめ、『真言三密修行問答』などのいくつかの著作である。そして、これらの著作において表わされているものが、本論の主題とする興教大師の菩提心説のもう一方の面としての密教的な即身成仏を前提とした淨菩提心説である。そこで、次に、この興教大師の淨菩提心説について、『大日經』をはじめとした興教大師以前の思想を対比しながら考察していこうと思う。

二、真言の淨菩提心

興教大師の密教的な即身成仏を前提とした菩提心説を考えると、まず注目されるのが、『真言淨菩提心私記』という書名に見られるように、「真言淨菩提心」として、菩提心を淨菩提心、それも真言の淨菩提心と規定したことがある。このことは、興教大師が、真言以外の仏教諸宗派における菩提心とは異なった、真言密教独自の菩提心であることを強調するために、敢えて真言という言葉を用いて淨菩提心を規定したものと考えられる。そして、この真言独自の淨菩提心というのは、興教大師の顕密差別思想から考えるならば、真言密教のみに説かれている菩提心であって、いわゆる顯教で説かれるものとは比較にならないほど優れた菩提心であると考えられる。

それでは、この真言の淨菩提心とはどのようなものであろうか。興教大師は、この淨菩提心を定義して、『真言淨菩提心私記』の中で、

真言の淨菩提心とは、これ自性法身の心地法界にして、大日如来の心王の具体なり。また一切衆生の色心の実相にして、普門海会の平等の種子なり。⁽¹⁾

と説いている。これによれば、真言の淨菩提心とは法身大日如来の心そのものであり、まさに法身の悟りの境界その

ものである。しかも、この浄菩提心はあらゆる衆生の色心の実相でもあるわけである。この一切衆生の色心の実相とは、『五輪九字明秘密釈』において、「毘盧遮那の平等智身」であるともいわれ、また色心を六大に当てはめて、「六大法身の法界体性智」であるとも言っている。⁽¹²⁾したがって、真言の浄菩提心とは法身大日如来そのものにほかならず、あらゆる衆生を身体的にも、心的にも成り立たせている根源、すなわち「六大」であるといえる。「六大」は、弘法大師が『即身成仏義』において、「如来の三昧耶身」であると言って、衆生も如来もともに成り立たせている根源として、即身成仏の根拠としていた。⁽¹³⁾興教大師は、この弘法大師の六大の説を、浄菩提心に結びつけて、即身成仏の根拠としたのである。

したがって、この浄菩提心は、

この浄菩提心は、これ一切衆生自然本有の心地の実際にして、すなわちこれ一切智智なり。如実に了知するを、名づけて一切智者とす。⁽¹⁴⁾

と説かれているように、衆生に本来的にそなわっているものであり、一切智智でもあるわけである。しかし、この一切智智は衆生にもと備わっているものではあるが、まだ顕在化しておらず、潜在的なものである。したがって、この潜在的な浄菩提心をありのままに覚知することが如実知心であり、一切智智であって、これを覚知したものが一切智者となるのである。しかも、興教大師によれば、この浄菩提心を覚知すること、すなわち如実知心には段階があり、これがいわゆる十住心である。そして、第九極無自性心までの段階での如実知心はまだ不完全であって、完全な浄菩提心ではなく、第十秘密莊嚴心での如実知心こそが、究竟の浄菩提心であり、法身大日如来の心そのものである。⁽¹⁵⁾

このような興教大師の浄菩提心説の典拠は『大日経』や『大日経疏』に求めることができる。『大日経』において

は、菩提心は菩提心を清淨にすることであり、極無自性心であつて、あくまでも一切智智の因とされておき、一切智智と菩提心とを同等のものとされたことはなかつた。しかし、この一切智智の因としての菩提心は、最初の菩提心と言われているように、一切智智が獲得されるまで常に保持されていくものであり、一切智智を獲得した時点が究竟の菩提心であると考えられることもできる。一方、如実知自心は『大日経』においては、一切智智であり、如実に自心を知っているものが一切智者であつたといえよう。この如実知自心を明らかに菩提心として解釈し、これを法身大日如来の内證として解釈したのが、『大日経疏』であり、弘法大師である。もちろん、両者ともに、菩提心を因とし、その因としての菩提心と如実知自心とを同等とするなど、かなり重曹的な解釈をしていたことは事実である。⁽¹⁶⁾

これらの教説を踏まえて、興教大師は淨菩提心を法身大日如来そのものとして、一切智智と見ており、この淨菩提心を如実に知ることが如実知自心であるとしている。そして、淨菩提心はすべての衆生に本来的に備わっているものであるから、これをありのままに覚知し、この内在的な淨菩提心を開發すれば、一切智智を獲得することができ、即身成仏することができるのである。そこで、興教大師の淨菩提心説において、次に問題となってくるのは、いかにして、この淨菩提心を開發するかということである。

三、淨菩提心の開發

それでは、この淨菩提心を開發するためには、どうすればよいのであろうか。これに関して、興教大師は、淨菩提心を「真言行者の入修の秘要」であり、「悉地成就速疾の妙薬」であるとして、修行の問題においても淨菩提心が肝心なものであるとしている。そして、悟りに至ることができるのは、この淨菩提心の「一体速疾力三昧」によるとま⁽¹⁷⁾で言っている。この「一体速疾力三昧」とは、『大日経』の「具縁品」に説かれている、毘盧遮那が入っている三昧

である。⁽¹⁸⁾しかし、『大日経』では、毘盧遮那は一切如来との一体速疾力三昧に入っており、これは毘盧遮那が一切如来と完全に一体となった状態を表わしている。興教大師は浄菩提心を毘盧遮那そのものであると考えたことから、衆生に本来的に備わっている浄菩提心にも、諸仏の浄菩提心と速やかに一体となる力があるものと考えたのであろう。したがって、眞言行者には、衆生の浄菩提心と諸仏の浄菩提心とが速やかに一体となろうとする力が働いて、それによって衆生の浄菩提心が諸仏の浄菩提心そのものになり、仏の境界に入るのである。そして、この浄菩提心の持つ「一体速疾力三昧」を働かせる契機となるものが、いわゆる三密行である。

しかし、浄菩提心の力があるからといって、ただ三密行を修すれば、それだけで即身成仏できるというわけではない。というのは、『眞言三密修行問答』に、

もし心に浄菩提心の実相を念ぜざれば、三業の所作、皆これ虚相不実にして、まったく三密にあらず。⁽¹⁹⁾

と説かれているように、浄菩提心の実相、すなわち毘盧遮那の心地法界を念じて、三密行を修さなくては、衆生の三業は三業のまま、三密へと変換しない。これは、

本尊の身語意の三業は、皆、実相に住して、まったく戲論妄想なし。三業の所作、皆ことごとく秘密なり。凡夫はいまだ浄菩提心の如実の相を證せざるが故に、たとい法身の内證の三密を修行するといえども、もし浄菩提心に相應せざる時は、身に本尊の印を結び、口に本尊の眞言を誦し、意に本尊の義理を念すとも、眞実の三密を成ぜず。もし人、心、浄菩提心の実相に安住する時は、もろもろの身業、もろもろの語業、もろもろの意業、皆、三密を成ず。⁽²⁰⁾

というように、本尊の三業は秘密であり、衆生はこの浄菩提心という三密の実相を證していないからである。したがって、興教大師は浄菩提心の力を引き起こす契機としての三密行を修するにあたって、この浄菩提心を念ずるか、

あるいは淨菩提心に相應するか、淨菩提心に安住するかということが重要な点となってくるのである。

つまり、興教大師において、淨菩提心とは、悟りそのものであるとともに、悟りに至っていないものにとつては、その悟りに至るための最上のものである。そして、この淨菩提心が本来的に持っている諸仏の淨菩提心と一体になろうとする力によって、衆生は即身成仏することが可能となるわけである。しかし、何もせずにこの淨菩提心の力が働くわけではなく、その力を働かせるきっかけとなるものが三密行であるが、しかし、この三密行も淨菩提心と相應した上で修されなければ、衆生の三業が仏の三密へと変換することはできないのである。

このように、淨菩提心の力を働かせるためには、その淨菩提心と相應しなくてはいけないわけであるが、この一見パラドックスにも似た状況を打開するために、興教大師が打ち出したものが、深般若心と深信とであると考えられる。

このうち、まず、深般若心については、『五輪九字明秘密積』において、

もしこの最上秘密不二大乘に入つて修行せんと欲する者は、まずすべからく深般若心を發起すべし。しかる後にまさに三密行を修すべし。⁽²²⁾

と説いて、三密行を修する前に、深般若心を発す必要があるとする。そしてこの深般若心は、あるいは勝義心でもあらうとして、

仏道権実の岐を簡括して 劣を捨て勝を取るを勝義と名づけ 法海淺深の区を分別して 妄執を起すことなきを般若と稱す⁽²³⁾

と説いている。これは、『菩提心論』に見られる勝義菩提心や、弘法大師の『三昧耶戒序』における勝義心に当たるものであり、さまざまな仏教の教えを取捨選択して最上のものを知る心である。より具体的には、弘法大師の『十住

心論』における十住心のそれぞれの勝劣を知ること、異生羶羊心から秘密莊嚴心までの十種の心の状態を如実に知ることである。このような深般若心を発すことによって、間違ひなく悟りに至ることができるわけである。

次に深信であるが、これについても『五輪九字明秘密釈』に

修真言の行者、深智なしといえども、ただ信と相応して、ただ誦し、ただ結し、ただわずかに字印形の三種の秘身の相貌を観する時、また往昔の無量の重障、現在の無辺の重罪、及び過現所起の無数恒沙の無明妄想等あるといえども、自らこの密誦の明力、観念力の故にかえって清淨と成るべし。²³⁾

というように、信と相応して三密行を修することが、即身成仏への道であるとしている。そして、ここでいう信というのは、『末代真言行者用心』に説かれているような、深信であり、長い間修行して悟りが得られなくても、それに對して疑いを持ったり、修行を諦めるような心を起こさないことであると考えられる²⁴⁾。しかも、興教大師にとつては、この信心の対象は、あくまでも真言密教の教えであり、この教えは真言の淨菩提心において統合されるため、淨菩提心とその有している力をひたすら信じることが深信といえよう。そして、ここの深信は『大日經疏』における白淨信心としての菩提心であり、また、弘法大師の四種菩提心のうちの信心にあたるものといえようが、興教大師にとつて信心はそれまでに示されていた信心よりも、深信としてさらに強いウエイトが置かれている。

すなわち、興教大師においては、この深信と相応して三密行を修すれば即身成仏することが可能となるのである。しかも、このパターンは、前述の淨菩提心と相応して三密行を修するものと同じであり、淨菩提心を信と言いつ換えている。したがって、淨菩提心と相応した三密行というのは、淨菩提心をひたすら信じるという深信にもとづいた上での三密行であるといえよう。すなわち、興教大師は、真言の教え、すなわち淨菩提心とその有している力を何の疑いも持たずに、ひたすら信じることによって、淨菩提心の持つ力が働いて、即身成仏を可能ならしめるものと

考えていたのである。そして、この深信のもとに、淨菩提心を働かせる契機として三密行が必要となり、その前段階として法を選び取る深般若心が必要となるわけで、この深般若心や、この三密行は、いわば二義的なものとなっているのである。

そこで、この論理の帰結として、必然的に深般若心や三密行のすべてが揃わなくても、深信をもってさえいれば、これらのどれか一つのみが契機となつて、淨菩提心を働かせて即身成仏が可能となるとする、いわゆる一密成仏説が立てられてくる。これについて、興教大師は、『五輪九字明秘密釈』において、四種の即身成仏説を説いている。⁽²⁵⁾それは、すなわち、深信と深般若心と三密行とのすべてが備わつて即身成仏するものと、深般若心がなくとも、深信と三密行とによつて即身成仏するものと、深信と三密行のうち二密行だけによつて即身成仏するものと、最終的には深信と一密行のみで即身成仏するものとの四種の即身成仏説である。⁽²⁶⁾この四種の即身成仏説は、興教大師が即身成仏する機根を四種に分類したものにそれぞれ相当するものと考えられる。

そして、ここで説かれる一密行だけによつて成仏するときも、二密行によつて成仏するときも、ともに実際に成仏するときには、

彼の二行一行等に依つて成仏すとは、これ正成仏の時にあらず。また余の二行を修する不思議の加持力によるが故に、たちまちに余の二密等を出生して、三密具足して即身成仏す。⁽²⁷⁾

と説かれているように、三密が備わつて即身成仏するわけであり、ここで説かれる不思議の加持力は淨菩提心の力であろう。すなわち、深信があつて、そこにたとえ一密行という契機であっても、それが加われれば、行者が本来的に備えている淨菩提心の持つ力が働いて、行者の淨菩提心と仏の淨菩提心と相應する。そして、この淨菩提心は三密の実相であるため、淨菩提心が相應すれば、その力によつて必然的に三密が具足して即身成仏するのである。

しかし、ここでは、深信によって淨菩提心を働かせる契機として最終的には一密行を修することが必要とされるが、一密行すらも修さずに、ただ深信のみの力だけによって、淨菩提心の力を働かせることは出来ないであろうか。これに関して、興教大師は、現身往生の機と順次往生の機とを分けたところで、信だけで行のないものは順次往生するとして、即身成仏することは不可能であると考えていたものといえよう。そして、この順次往生を目指すものには、深信のみで可能であるとする菩提心説が『一期大要秘密集』に見られた發菩提心を主題とした淨土教的な菩提心説である。したがって、少なくとも、最後の「一密成仏は、興教大師の淨菩提心説の最終的な帰結であり、即身成仏を可能ならしめるための限界であるといえよう。

まとめ

以上のように、興教大師は、菩提心説に関しても、淨土思想と密教思想との統合を試みて、順次往生を目的とする場合の發菩提心を中心としたものと、即身成仏を目的とする場合の淨菩提心を中心としたものとに分類して、その兩者の転換点をいかに死を見つめるかという、機根や行などの違いに置いた。そして、この兩者に共通するものとして深信を重視し、この信を起点としながら、行の浅いものは順次往生して、行によって自らの持つ淨菩提心の力が働いたものは淨菩提心を開發して即身成仏することが可能であるとした。

また、淨菩提心ということだけについて見るならば、淨菩提心をどう見るかということよりも、むしろいかに淨菩提心を開發するかという面において、興教大師の独自性が發揮されている。興教大師は、淨菩提心に「一体速疾力三昧」を認め、それを淨菩提心の持つ力として捉えて、この淨菩提心に、深信が働きかけ、また三密行という契機があることによって、淨菩提心が開發され、即身成仏するものとした。そして、ここで、三密行を一つの契機として見る

ことによって、一密成仏や二密成仏というものを想定し、これら一密行や二密行によっても、最終的には淨菩提心の力によって三密が相応して、即身成仏するとしたのである。したがって、興教大師は、この一密成仏説の根拠として、深信と淨菩提心とを設定し、特に淨菩提心に強いウエイトをおいたものといえる。そして、興教大師はこの淨菩提心を真言密教の中核として捉えており、興教大師のさまざまな思想的展開においても、この淨菩提心説を無視することはできない。

註

- (1) 拙著「興教大師の菩提心について……」『一期大要秘密集』を中心として……」（『智山学報』第四〇輯、平成三年三月）参照
- (2) 三福の一つとして發菩提心などを挙げている。（大正蔵一二・三四一c）
- (3) 弥陀の四十八願の一つとして發菩提心などを挙げている。（大正蔵一二・二六八a）b）
- (4) 發菩提心は淨土菩提の綱要であり、四弘誓願であるとする。（大正蔵八四・四八b）c）
- (5) 菩提心を行として捉え、これをしていたのでは念仏に専念できないため、菩提心は無用であるとする。（大正蔵八三・一六c）一七a）
- (6) 『秘密三昧耶仏戒儀』に関しては、近年、弘法大師の眞撰を疑問視する論文も発表されている（『苦米地誠一』『秘密三昧耶仏戒儀』をめぐる……『入曼陀羅抄』に於ける引用を中心に……）『智山学報』第三八輯、平成一年三月、同『秘密三昧耶仏戒儀』の成立をめぐる……『牧尾良海博士喜寿記念儒佛道三教思想論攷』所収、平成三年二月、山喜房仏書林など）。しかし、興教大師が『心月輪秘釈』に、この『秘密三昧耶仏戒儀』の文を引用しているので、少なくとも、興教大師が活躍した時代に『秘密三昧耶仏戒儀』が成立し、広まっていたことは十分に推定され得る。また、興教大師が、この論を弘法大師の著作と考えていたかどうかについては、興教大師の『高祖御製作書目録』（『興教大師全集』下一四五九〜一四六四）の中に「秘密三昧耶仏戒儀」の書名が見あたらないことや、「大師の文のいわく」とは言わずに、ただ「文にいわく」と言っていることなどから、弘法大師の著作として扱われていない可能性が高いものと考えられる。しかし、興教大師の著作で

は、ただ「文にいわく」として、弘法大師の文を引用している例もあるので、これだけで断定するのは性急であらう。

- (7) 『弘法大師全集』二・一七四～五
 (8) 『興教大師全集』下一〇七一～二
 (9) 『二期大要秘密集』では、懈怠小機と精進大機とを對比させて、それぞれ順次往生と現身成仏とにあてている〔興教大師全集』下一二二一三〕。また『五輪九字明秘密集』では、但信行浅と上根上智とを對比させて、それぞれ順次往生と現身成仏とにあてている。〔興教大師全集』下一一七八〕
- (10) 『菩提心論』では、その冒頭に「もし上根上智の人あって、外道・二乗の法を染わず。大度量あって、勇銳にして惑なからん者は、よろしく仏乗を修して、まさにかくのごとくの心を発すべし。」(大正蔵三三・五七二b)と説いていることから、その対象としているものは「上根上智の人」であると考えられる。
- (11) 『興教大師全集』上二〇五
 (12) 『興教大師全集』下一一三四
 (13) 『弘法大師全集』一・五一一～二
 (14) 『興教大師全集』上二〇六
- (15) 『五輪九字明秘密集』では、浄菩提心を如実知自心と規定して、第九極無自性心までを分の如実知自心で、満の如実知自心ではないという。〔興教大師全集』下一一三三～四〕また『真言浄菩提心私記』では、第十秘密莊嚴心の分の浄菩提心は真言究竟の浄菩提心であるとする。〔興教大師全集』上二一一～三〕
- (16) この如実知自心と菩提心、極無自性心とに関する解釈の問題については、拙著「如実知自心と極無自性心について」〔密教学研究』第二三号、平成二年三月〕参照。
- (17) 『真言浄菩提心私記』〔興教大師全集』上二〇六～七〕
 (18) 大正蔵一八・九b
 (19) 『興教大師全集』上三〇〇
 (20) 『興教大師全集』上三〇一
 (21) 『興教大師全集』下一二二三～四
 (22) 『興教大師全集』下一二二四
 (23) 『興教大師全集』下一一六六
 (24) 『興教大師全集』下一三九七
 (25) 『興教大師全集』下一七三～四
 (26) 『五輪九字明秘密集』〔興教大師全集』下一一七四～七〕
 (27) 『同』〔興教大師全集』下一一七四〕